

タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」

第37回：第4章-その9-

これからの一歩

著：小幡知史
企画：渡辺修宏
小幡知史
二階堂哲

作中のセリフ

私はこれまで、本企画の中で「家裁の人」と「ブラックジャックによろしく」の2作品を紹介した。

前者の「家裁の人」は、「答えがないという答え」という発想を私にもたらし、対人援助の実践において常に悩み続けるという、私自身のある種の価値観や思想のレポートに寄与している。また後者の「ブラックジャックによろしく」は「僕がやらなきゃ、誰がやるんですか？」という作中のセリフが、私自身が常に対人援助の最前線に現在もなお居続ける強い動機に関わるレポートに寄与している。

ところで、これまでの連載を振り返っていると、作品を紹介しているようで、実は影響を強く受けているのは作品自体というよりも登場人物の言葉であることに気付かされた。実際、今回ご紹介する漫画も、作品全体というより、作中のある人物の、ある言葉が私の対人援助実践のレポートに大きく影響している。

努力した者が全て報われるとは限らん。

ということで今回ご紹介する漫画は、「はじめの一歩」である。

すでに累計100巻を超える大長編スポーツ漫画であり、ご存知の読者も多いかと思われる。物語全体は、主人公でいじめられっ子だった「幕之内一歩」が、ボクシングと出会って大きく変化していくサクセスストーリーと言えるだろう（近年は主人公が引退してコーチにまわるなど、迷走？している感もあるが...）。

この漫画には、魅力的なキャラクターが数え切れないほど登場する。主人公のライバル的な存在である「宮田一郎」、同じボクシングジムの先輩で世界チャンピオンである「鷹村守」、さらに良き先輩ポジションの「青木勝」や「木村達也」...

すべてのキャラクターが生き生きとして、さらにその性格を裏打ちするバックボーンも

あり、それぞれの人となりを見るだけで大いに感銘を受ける。そんな中で、私の対人援助をリブートするきっかけとも言えるキャラクターは、主人公...ではなく、指導者として登場である「鴨川源次」(以下、会長)である。

すでに老齡のキャラクターであるが、名伯樂として名高い設定だ。会長は主人公の才能にいち早く気付き、独自の指導法で主人公にボクシングを教えるだけでなく、ボクシングという競技に対するマインド、精神性についても教示する。さらに会長は主人公を競技者としてだけでなく、人としてどのように生きるか、ある意味で生きる道についても指導する。

そんな会長が作中で放った言葉。それは「努力した者が全て報われるとは限らん。しかし、成功した者は皆すべからく努力しておる」というものである。

成功した者は皆すべからく努力しておる

自身の対人援助をリブートする言葉...と言っておきながら、実はこの言葉が発せられた詳しい文脈は失念してしまっている。ただ、私がこの言葉に触れたタイミングは、おぼろけながら覚えている。

たしか大学院1年生の頃、大学院には入ったものの、学ぶことは多いし、さらに将来の進路は不確かで、常に不安に苛まれていた。心理職として成功はおろか、そもそも生計を立てていけるのか...。そんな時で、上述の会長の言葉に出会ったのだ。

現実世界では、今までしてきた努力が必ず報われるとは限らない。ただ反面、成功した人はすべからく努力していることも事実であろう。この当たり前ともいえる言葉が、当時の社会経験のない学生だった自分にとっては、いたく刺さったことを記憶している(また、会長の人物像が当時の恩師と似ていたことも、大きいかもしれない)。

その後、私自身は障害者支援の現場に入職するのだが、その現場の中でも学会発表を含めた研究活動を続けていられるのは、会長の言葉がやはり大きかった。実は現在進行形で、自身の研究活動といった自己満足の側面も強い活動を続けていられるのは、努力という最低条件がなければ成功、私の現在の文脈で言えば利用者の最善の福祉に寄与しないだろうという想いが強い。

前回の連載にも関連するが、自身の研究活動をする動機づけは常に揺らいでいる。しかし、揺らぐたびに会長の言葉が「これからの一歩」を踏み出すための、自身の原動力をリブートする一手になっていることは間違いない。

—つづく—